ワーを浴び、いつもと同じメンバーで家に帰りいつもと同じ時間に家に到着する、家につき、同じ時間に眠りを着く。

日曜日、いつもと同じく携帯で時刻をみて家を出る。今日は雪が降っている。天気予報を調べてみても一日中雪だ。しかし今日もいつもと同じように自転車に乗る。しかしいつも見るメンバーは誰ひとりいない、おそらくは電車が止まっているのだろう。カーブにさしかかった所で雪に滑って自転車が転倒する。昨日とはあまりにも違う風景に不安を覚える、立ち上がる気力がない。そこにはいつもとはまったく違う白銀の光景が広がっていた。

月曜
あ！朝だ。いつもと同じようにベッドから私は飛び起きた。今日の朝食は目玉焼きとご飯味噌汁、ソーセージ、納豆、野沢菜、そしてミルクだ。時計を見ると朝八時、私はいつも八時半の電車に乗るので遅れないように朝食をかきこみ走って出て行った。その日の電車はいつもより混んでいた、やけに人が今日は多い。街も会社内もやけに沢山いた。そしていつものように夜満員の電車に乗りながら自宅に帰った。

火曜
あ！朝だ。いつもと同じようにベッドから私は飛び起きた。今日の朝食は目玉焼きとご飯味噌汁、ソーセージ、納豆、野沢菜だ。今日は喉が渇いてなかったので、ミルクはやめた。時計を見ると朝八時、私はいつも八時半の電車に乗るので遅れないように朝食をかきこみ走って出て行った。その日の電車は昨日より混んでいなかったがやはり人は沢山いた。そしていつものように夜満員の電車に乗りながら自宅に帰った。

水曜
あ！朝だ。いつもと同じようにベッドから私は飛び起きた。今日の朝食は目玉焼きとご飯味噌汁、ソーセージ、納豆だった。最近いつも同じ飯を食べている気がするけれど飽きがこない。私はいつも八時半の電車に乗るので遅れないように朝食をかきこみ走って出て行った。今日は人がいつもの三分の二くらいしか人がいない。まぁ疑問にも思わずそのまま会社に行った。そしていつものように夜電車にのって帰っていった。

木曜
あ！朝だ。いつもと同じようにベッドから私は飛び起きた。今日の朝食は目玉焼きとご飯味噌汁、ソーセージ、やっぱり朝はこれにかぎる！何か足りない気がするがそれでも私は食べていた。電車にのる時間になったので私は朝食をかきこみ走って出て行った。電車に乗ると、人が半分になっていた。電車の中とやけに目が合う、その後会社に着き中を見回すとやはり人が減っている。みんな休暇か、と思いながら夜電車に乗って帰った。

金曜
あ！朝だ。いつもと同じようにベッドから私は飛び起きた。今日の朝食は目玉焼きとご飯味噌汁、何か足りない気がするがそれでも私は食べていた。電車にのる時間になったので私は朝食をかきこみ走って出て行った。今日も電車の人数が減っていた、一人の男がこっちに寄ってきて朝はちゃんと食べないとい

けないよ … 。と一言いって通り過ぎて言った。朝から酔っ払ってんじゃないよ！と思いつつ電車を降り会社へと向かった。「会社では机の上に朝はしっかり食べましょう」という手紙がおいてあった。誰かのイタズラだと思いつつ、なぜ自分の食生活を知っているのだろうと疑問を一つかかえたまま夜電車に乗り帰った。

土曜
あ！朝だ。いつもと同じようにベッドから私は飛び起きた。今日の朝食は目玉焼きとご飯をかきこみながら電車に走った。電車の中には人は殆んどいない、すると昨日の男がまた寄ってきて、「知らないよ … 」。と一言いって通り過ぎていった。会社につくと、人はいなく今日会社は休みか、と思いながら今日は体調も悪いので帰ろうと思い、その日は帰っていった。

日曜
今日は体調が悪く朝食は食べずに寝ていた。なんの音もしない。テレビもつかない。そのまま寝てしまった。頭の中で男の声が響く。「おやすみ … 。」と次の日がなかったのは言うまでもない。

月曜日　久しぶりに海岸で散歩をした。高校が海の目の前だったので時々授業をサボり友達と遊んだなぁ。なんてことを思い出しながら歩いた。冬なのに随分海には人が遊んでいた。確かに、今日は暑い。

火曜日　昨日、久しぶりに海岸を歩いたら気持ちが良くて、ダイエットのためにも今日も海へ向かう。やはり、冬なのに暑い。夕陽がとてもきれいだった。しかし「ん？太陽がなんか大きくないか？」と思った。

水曜日　今日は高校の友達と、先生に会いに行くため、久々高校へ遊びに行った。懐かしくなり、教室にも行った。３年間教室の窓から海を眺めていた私だが、昨日同様こんなにも太陽が大きかったか、と疑問に思う。むしろ昨日よりも大きくなっているような気がする。そして、高校の冬の廊下は、「ここは冷蔵か？」ってくらい寒かったのに今日は暑い。

金曜日　この一週間あまりにも暑いので、急遽、夜、花火をすることにした。でもなかなか夜がやってこない。というのではなく、もう私の腕時計は21：00 なのに外が暗くならない。昼間のように明るい。いや昼間以上に明るい!! まぶしすぎる。あれ？そして、太陽が大きい！いやあれは大きすぎる⁉ 暑い”というよりも、もう‘ 熱い”…。

土曜日　外はすごく暑いが仕方なく、バイト先へ向かう。お客さんも皆ほぼ裸に近い格好をしている。海沿いだから、場所柄夏には水着のお客さんもたくさんいるが、一応飲食店のため店内は何か羽織るよう、お願いするが、今日はもう店長も諦めた。ビールやアイスがたくさん売れる。

日曜日　今日はもう暑くて外に出られない。しかし、家にいるのが退屈で外へ出てしまった。しかしその瞬間……見えたのは、太陽だけだった。そして、暑くもなくなってしまった。

藤井 遼太

僕はゲーマー。いろんなゲームが好きなやつ。1 週間の休暇が始まる。

月曜日
怪しいお店でシュミレーションのゲームを薦められちょっと興味心で買ってしまった。とてもリアルなもので現実とまったく一緒な感じで建物も一緒現実味があってすっかりはまっていってしまった。

火曜日
新聞に入ってる広告で近くの大手企業のデパート達がいっせいにセールをやるらしい。まぁこもってゲームやるから関係ないが。するとシュミレーションゲームでも何故か画面の中の車の交通量が多い。しかし気にしなかった。

水曜日
ずっと自分のつけてるこのゲーム。昼も夜もあり実によく出来てる。街のビルの見栄えが気に入らなかったので削除した。セーブが出来ないらしくつけっぱなしで外へ食べ物がなかったので買いに行った。なんとビルが消えていた。。まさかと思ったが周りの人に聞くとなんだかそこの経営者の意向だとか。偶然が重なっていた。

木曜日
昨日の事もあり今度は野球場を作ってみた。そして外へ行ってみると新球場ができていた。実に面白い。もっとのめりこんでいった。

金曜日
自分のいえを豪邸にしてみたりきらいなやつの家を消すなどしたりして楽しんだ。もう満足いっていた。でもこんなゲームあっていいのだろうか。

土曜日
町の人は何も不安がらずに生活している。それも不思議だったこの 2 日くらいでこんなに変わっているのに

日曜日
まさかのことが起こった停電。そしたら自分の身もろとも一瞬に消えたゲームのゲームオーバーと同じように。。。

1 日目
今日もいつも通り 9 時に目が覚めた。
「今日も学校に行くか。」
朝ごはんを食べて、歯をみがいて、顔を洗って家を出た。
6 時に家に帰ってきていつも通り 0 時にベッドに入った。

2 日目
目が覚めた。
「今日も学校に行くか。」と思い目覚まし時計を見ると、もう 12 時だった。
「遅刻だ。」
急いで支度をして学校に行った。

3 日目
目が覚めた。
ふと目覚まし時計を見ると 15 時だった。
「おかしいな。」
最近、時間通りに起きられなくなっている。
その日は学校に行かず家いた。

そして、6 日目
目が覚めたら、２１時だった。
「もしかしたら … 。」
いやな予感が頭をよぎった。

7 日目
目を覚まさなかった。

月曜日
朝食を食べながらニュースを見る。パンをかじりながら、窓を開けて、のびをして、新聞を読む。
いつもの習慣だ。
朝の光がまぶしい。今日の天気は晴れ。
いつも通りの時間に駅へと歩き、学校へ向かった。

火曜日
朝起きて窓を開ける。昨日より薄暗い。
いつも通りパンをかじりながら窓を開けてのびをして、新聞を読み始めた。
隕石や月について何か変化があったようだ。
「まぁ大したことはないだろう」と軽く考え、昨日と同じように学校に向かった。

水曜日
朝起きて窓を開ける。もう夕方かと思うような暗さである。
今日の新聞も一面、科学的な話だ。昨日はおとといより、月の大きさが二倍になったらしい。
「そんなバカな... 」とつぶやきながら、また学校へと急いだ。
授業を終え、学校を出ると暗いはずの空が明るい。次の瞬間目に飛び込んで来たのは、巨大な月であった。
それでやっと、いつかの新聞の記事は間違いなかったとやっと思い知ることとなった。
その巨大な月は、その重さに耐え兼ねているかのように上下に揺れている。
私はあまりに驚いてすぐに家に帰って寝た。

木曜日
朝起きた。しかし、恐くて窓を開ける事ができない。
仕方なく外の景色を見ないまま、のびをして、パンをかじりニュースをつけた。
すると、きのう見た月がさらに大きさを増して海に半分漬かっている。あまりの重さに耐えきれなくなって、海に落ちてしまったようだ。
その反動でおっきな地割れができ、津波が起こり、街を飲み込んでいっているようだ。
もしこのまま月の巨大化が進んでしまえば、日曜日に私達の住む場所も飲み込まれてしまうという。

金曜日
昨日のニュースが頭から離れない。

恐る恐る窓を開けてみる。真っ暗だ。何も見えないし、誰一人いないようだ。
「みんな今の異常気象を知っているのかなぁ」なんてちょっと不安になり、夜に月が出るまで待つことにした。
だんだん空は明るくなり始め、月はみるみるうちに大きくなっていく。
心なしか、ニュースの通り下半分は海に漬かったまま出てこないように見える。
もしかしたら、あさって地球上全ての場所が流されてしまうかもしれないと思うと、もう何もする気が起きない。
「明日になったら、これが全部夢だったらいいな」と祈りながら私は眠りについた。

土曜日
恐ろしいほどに外は寒い。地球の反対側から起こり始めた津波は、だんだん威力を増し、どんどん私達のところへ迫って来ている。
それが肌で感じられるような寒さだった。
夜が近付くにつれ、月が海の中で揺れ、波を荒立てている音が聞こえてくる気がした。
ザブンザブンと音を立て、私の恐怖を掻き立てた。
寝てしまえば、明日は来ないかもしれないと思い、眠い目を擦りながらずっと外を見つめていた。
しかしやはり睡魔には勝てずいつの間にか寝ていた私は、パッと目を覚ますと慌てて起き上がり、日にちを確かめた。

確かに今日は日曜日。
「あれはやっぱりただの異常気象だったんだ」とホッと胸を撫でおろし、今日という日が来た事を何よりも喜んだ。
そしてこの一週間、恐る恐る開けていたカーテンを思いっきり開けた。
そこにうつるはずの眩しい光はなく、代わりに窓ギリギリまで近付いた月が見えた。
次の瞬間、その月を乗り越えて見たこともないような大きな津波が窓ガラスを打ち割り、あっという間に家や学校、街全体を飲み込んで行った。
この一週間の変化を受け入れることもできないまま、本当に地球は何一つ残さず消えて行った。
そして、その後地球がどうなったかは、わたしはもちろん知ることはなかった。

月曜
朝、僕はいつものように目覚め布団からでた。二階で寝ている僕は、階段を下り、朝食を食べるためテーブルの自分の席についた。兄は仕事のため、もう出勤しようとしていた。
「いってきます。」と兄が言った。
「いって○ っしゃい。」と僕が答える。
いつもある光景だ。でも、なんだかおかしい‥。しかし寝起きの僕は、そんな事を深く考えはしなかった。そのあと、急いで自分の支度をして、学校に向かった。その日は一限から授業があった。眠いのをこらえて集中して授業をうけていたが、ところどころ先生の声が聞き取れない。
「耳でも少し悪くなったかな。」と僕は軽く考えていた。
昼休みになり、友達と学荼にいった。
「何食べ○ か？」と僕が聞き、友達は
「ハ○ シ○ イス」と答えた。
「えっ？何そのハシイスって？」と言うと友達はハヤシライスを指差した。
「こ○ ってハシイスだっけ？」と聞くと、
「そうだ○ 。」と不思議そうに僕を見ていった。
家に帰って家族と話す。やっぱり聞き取れないところがある。変に思った僕は、部屋でア行から順に口に出してみた。そうすると、昨日まであった気がする「わ、を、ん、ラ行」が言えない。というか、家族や友達を見ていると、その意識すらない。僕は、変な夢だと言い聞かせながら布団に入った。

火曜
朝、僕はいつものように目覚め布団からでた。二階から下りると、昨日と同じように兄が出勤しようとしていた。
「いってき○ す。」
「いって○ っし○ い。」
昨日と同じ光景だ。でも明らかに違和感がある。しかし一限がある僕は、深く考える暇もなく急いで自分の支度をして、学校に向かった。
大学にいき、授業をうける。やはり聞き取れないところがある。
むしろ昨日よりもひどくなっているのがはっきりわかる。
家に帰って昨日と同じように口に出してみた。そうすると、昨日からなくなった「わ、を、ん、ラ行」に加え、「や、ゆ、よ、マ行」が言えなくなっていた。
それについて、周りの人達はやはり意識していない。怖いと感じながらも、どうすればいいか分からず、布団に入った。

水曜
朝、僕はいつものように目覚め布団からでた。外から雨が降っているような音がする。二階から下り、兄に
「あ○（雨)?」と外を指差して聞くと
「ああ、○って○○（降ってるね)」と言った。
はっきりいって聞き取れなかったが、雰囲気でなんとか理解した。昨日や一昨日のように大学で授業をうけるが、僕は授業の内容を理解するより、話している言葉を理解する事に必死になっていた。家に帰ってまた口に出してみた。今日は「ハ行、の、ね、ぬ」までが加えてなくなった。

木曜
朝起きて僕は、また何かなくなっていないか調べるため、ここ二、三日のように口に出してみた。今日は「に、な、タ行、そ」までが加えてなくなっていた。
ここまでくると何だか異国の地に来てしまったような気がする。
大学に行っても、友達との面白いはずの会話は一向に弾まず、逆に疲れてしまった。
家に帰ると、どっと疲れてしまっていてすぐに布団に入ってしまった。

金曜
朝起きて、昨日と同じように口に出して調べてみた。今日は「せ、す、し、さ、こ、け、く、き」までもが加えてなくなっていた。
こうなると話す事などほとんどない。ただ、相手が何か言っているようであれば
「ああ」と答えるだけである。
静かだが、精神的にとても辛く疲れる一日がすぎていった。

土曜
朝起きて、昨日と同じように口に出して調べてみた。だが、声が出ない。周りからも誰の声も聞こえない。最終的に残っていた「か、ア行」までがなくなってしまったのだ。本当に何の会話もない一日が始まった。しかし、みんな耐えられるはずもなく、だんだん何とか意思疎通をはかろうとしていた。

日曜
朝起きて、僕は外の光景を見て驚いた。いたるところで、みなお互いに意思疎通できない事にいらだち、争いが起こっていた。その中には小さい争いや大きな争いがあったけれど、その争いが止むことはなく、世界は滅びた。

月曜
朝起きると、テレビのニュースが騒がしい。ユーラシア大陸に地震が起こり、ロシアがほぼ崩壊してしまった。この地震を好機だと考えた北朝鮮がロシアに核兵器で攻撃を開始した。

火曜日
北朝鮮の攻撃が本格化して、ロシアは全て崩壊してしまった。その攻撃の一部が中国の領土にも被害を受け、問題となった。常任理事国は会議を開き、決議のけっか、北朝鮮に対してアメリカと中国が武力行使することがきまった。日本では駐留アメリカ軍は用意をはじめ、日本の自衛隊は北朝鮮の攻撃に備えていた。自分は何をしていたかというと、友達の家で寝ていたため、まったくそのようなことがおこっていることに気付いていなかった。

水曜日
攻撃が開始された。北朝鮮は核兵器を使用して、ヨーロッパ全土に攻撃した。中国とアメリカはヨーロッパ全土に警告をし、北朝鮮に攻撃した結果、日本時間の午後九時、北朝鮮全土が焼け野原と化して全員死亡して崩壊した。その五時間前、ヨーロッパに核兵器が落ち、ヨーロッパ全体で二十万人という大きな被害をだした。

木曜日
このことを受けて、ヨーロッパはアメリカと中国に問題があると主張し、世界大戦が勃発した。アメリカと中国は南米大陸とオセアニア大陸の国々に話を持ちかけ、同盟を組んだ。またヨーロッパは東南アジア諸国やアジア全域同盟を結んだ。日本はアメリカの同盟の方に組み、アメリカをバックアップする形となった。しかし、日本には戦争に対する意識が低く、いつも通りの生活をいとなんでいた。

金曜日
攻撃が始まった。日本時間午前六時、沖縄本島がヨーロッパ軍の攻撃により、消滅してしまった。この事態に日本は動揺を隠し切れず、みな非難をはじめた。私も家族に連れられて箱根の山奥に避難した。この頃世界各地で激戦はおこり、ものすごい数の死者をだしていた。また、地球にはものすごい爆発物の圧力により、地震が絶え間なく起こっていた。この時すでに何かがおこりはじめていた。

土曜日
両同盟国の戦いはますます激しくなるにつれて、死者の数が全人口の半分にま

で達していた。世界各地では異常気象が起こり、地震からくる津波や氷河が全て溶け、地表が海に沈んでしまった。また竜巻が各地で発生し、世界には黒い雲で覆われていた。

日曜日
私は何かいやな胸騒ぎがして落ち着かなかった。でもこの場からどこかに行くこともすることもなく、じっとしていた。じっと目を閉じていると … 。

地球は核がやられて爆発してしまった。宇宙のもくずとなり、地球は消滅してしまった。

南木 健佑

ピッピッピッピッピッピッピッピッ … 今日もまた朝が来た。今日は

月曜日、その日僕は 6 コール目で目覚ましを止めた。「ふぅ、学校行くか」今日もいつもと変わらず目覚ましに起こしてもらった。今日は 6 コール目に起きることができたことにささやかな喜びを噛み締めながら学校へ向かう。

火曜日、ピッピッピッピッピッピッ … 今日も同じような朝が来た。ただひとつを除いては。「やった！また記録更新だよ」そうこの日僕は 5 コールで起きることが出来たのだ。今日は学校も早めに終わるためその後すぐバイトを入れた。そしてクタクタに疲れ果ててそのままベッドに潜りこんだ。

水曜日、ピッピッピッピ … また朝だ。しかし今日は自分でも驚いた。「まさか、あんなに疲れていたのに … 。」 寝たのだがやはり疲れは取れない。本当はもっと寝たかったはずだが起きてしまったので仕方なく学校に向かう。早く家に帰りたいが今日もバイトが入っているためまた働きヘトヘトになりながらもなんとか家に帰る。そしてまたベッドに入った。

木曜日、ピッピッピ … また朝だ。連日のバイトの疲れも取れていないのに 3 コールで起きてしまった。僕はなんとか自分の体をベッドから引きずり出しまた学校に向かう。もちろん今日もバイト。先が思いやられながらも仕事をこなし、また帰路に着いた。

金曜日、ピッピッ … 朝である。あれだけ疲れていたのに今日は 2 コールだ。「さぁ学校行くか」僕はなんとかベッドから這いずり出て学校へ向かった。そして放課後またバイト。僕はふんばって乗り越えた。

土曜日、ピッ …「おいおいどうなっているんだ俺の体は、もっと休もうぜ」ついに僕は目覚ましの電子音 1 回で起きてしまう体になってしまった。これならどんな眠くても目覚ましさえ鳴れば起きることができるだろう。バイトを終わらせてやっとの思いで家に着きすぐさまベッドに潜った。「どうせ目覚まし鳴ったら起きるだろ」ゆっくり目を閉じた

日曜日 … 。目覚ましは鳴ることはなく、僕は目を覚まさなかった。

　第一日目　今日は目覚めがよかった。外は晴れてるし、いつも目覚めの悪い私が目覚ましよりも早く起きるなんて奇跡だ。テレビをつけると占いがやっていた。
　「今日一番よい運勢の星座は … おうし座のあなたです。」
そうか、今日はいいことがある日なのだ。うきうき仕度をすませ、大学へと向かった。
　「今日早いね！」そう驚きながらクラスの友人が話しかけてきた。
　「その調子で明後日の待ち合わせにも間に合ってね。」
明後日はクラスの子と遊園地に行くのだ。楽しみでしかたない。

　第二日目　今日は昨日とは真逆に目覚めが最悪だった。外は雨だし、まだ起きたくない。目を覚ますため、テレビをつけた。
　「今日、最も悪い運勢の星座は … おうし座のあなたです！」
そうか、今日はやなことがある日なのだ。浮かない気分のまま仕度をすませ、大学へ向かった。最寄駅に着くと、いつも以上に人がいる。ホームは人であふれていた。
　「故障のため電車が遅れています。」
電車が故障するなんて初めてだ！なんてついていないんだろう。他に通学手段がないので、とりあえずホームで電車を待った。一時間後に電車の運転が再開され、大学へ行くことができた。しかし、授業は休講だった。一日、ほんとについてなかった。最悪な一日だ。しかし、明日は久しぶりの遊園地だ！それを楽しみに、一日を乗り切った。

　第三日目　今日は待ちに待った遊園地に行く日だ！目覚めもいいし、外は晴れている。朝食をとりながらテレビを見ているとまた占いがやっていた。
　「今日最もよい運勢の星座は … おうし座のあなたです！」
今日はいいことがありそうだ。少し早めに家を出て待ち合わせの駅へ行ったが、一番乗りだった。みんな早くこないかな。しかし、10 分、20 分過ぎても、誰も来なかった。不安になり、友人に電話してみると、
　「遊園地に行くのは明日だよ？」
馬鹿扱いされた。確かに今日行く予定だったのに、誰一人待ち合わせに来ないなんて。不思議に思いながらも大学へ向かった。

　第四日目　今日は目覚めが悪い。外は雨だし、まだ起きたくない。目を覚ますため、テレビをつけた。
　「今日最も悪い運勢の星座は … おうし座のあなたです！」

まただ。最近一位か最下位しかならない。まあ、そういう時期なのかもしれない。朝食をすませたが、雨は止まなかった。これは、遊園地は中止かもしれない。友人に電話してみた。しかし、
「遊園地に行くのは明日だよ？」
また馬鹿扱いされた。これはおちょくられているのかもと思い
「昨日もそういったじゃない。」
もう一度聞いた。しかし、昨日はそんなこと聞かれてないし、遊園地は明日だ。と言い切られ、自分の勘違いだと思えてきた。

第五日目　今日は目覚めがよい。外は晴れているし、気分がいい。しかし、妙に不思議な気分なので、恐る恐るテレビをつけてみた。
「今日最もよい運勢の星座はおうし座のあなたです！」
やっぱり！何かがおかしい。とりあえず、待ち合わせの場所には行かずに、大学へと向かった。
「今日早いね！」
そう驚きながら声をかけてきたのはやはりクラスの友人だった。
「その調子で明後日も遅れないでね！」
また同じ言葉だ！気分が悪くなり、すぐ家に帰り、何もせず、布団へと入った。

第六日目　今日の目覚めは最悪だった。しかし、私は無理をし、すぐに仕度をすませ、駅へと向かった。駅に着くと、ホームは人であふれていた。やはり…。怖くなり、家に帰り何もせず、布団に入った。

第七日目　今日の目覚めはよかった。外は晴れているし、気分がよい。テレビをつけると、
「今日最もよい運勢のあなたは…」
私が遊園地に行く日は永遠に来なかった…。

月曜日、いつものように大学へ行く。休日明けなのでとても憂鬱な気分になる。授業の時間ふとした事で自分のクラスを書くことになった。「あれ？僕のクラスって何組だっけ？」隣にいる友達に聞いて、やっと所定の位置にクラスの組を書くことができた。でも今までにも書いたことが何回もあるのになんだかはじめて書くような気がする。

火曜日、今日最後の授業の終了の鐘が鳴る。もう１６時１０分だ。友達とだらだらと他愛の無い会話をしながら駅へ行く。新宿駅に着いたところでいつも乗っていた電車が分からなくなる。「あれ？いつも何線に乗って家に帰っていたんだっけ？」結局、自宅に電話して家までの帰り道を聞く。大学生になってから何回・何十回とも通った道のりなのになんだか不思議な気分だ。

水曜日、朝いつもどおりにパン２つと牛乳を飲み大学へ行く、昨日のような失敗をしないために大学までの行きかたを書いたメモを持っていく。これで迷うことは無い。早速、駅でそのメモを見る。　－改札を通って右側のホームへ行く－　確かにこう書かれている。でも今の僕はその右が分からない。思い切って人に聞いてみるが、白い目で見られ誰も相手をしてくれない。……困った…。今日は大学にいけそうに無い。僕はそのまま回れ右をして家に帰ることにした。何とか家には帰ることができた。

木曜日、なんだか今日も大学へはいけないような気がする。仕方が無いから今日も大学を休むことにした。家には誰もいないので自分で昼飯を作らないといけない。お湯を沸かしてカップ麺に湯を注ぐ。「３分か……あれ？３分って何秒だっけ？」３分が分からないままに湯を注いでしまった。ずっとそのことを考えていたので麺がのびきっておいしくない昼飯になってしまった。

金曜日、さすがに親も心配になったのだろう、僕は病院に連れて行かれた。目の前に座っている男…多分男の人が僕に名前を書くように指示した。今まで何千回・何万回と書いてきた名前なのに紙に書いてみるとこれであっているかどうか分からなくなる。先生と名乗る人はあきれた顔で僕を部屋から追い出した。

土曜日、朝、見知らぬ誰かから布団から出されていすに座らせられる。目の前に座っている人が誰なのか分からない。僕の母親だというがまったく覚えが無い。嫌気が指した僕は部屋に戻り食事もとらずボーっとして一日を過ごした。

日曜日、苦しい。体中のなにかがものすごい速さで流れている。耳の奥から「ドックン！ドックン！」という音が聞こえる。部屋の中に誰かがいる。そいつ

は僕が近づくとそいつも近づいてくる。なんだかそいつの顔はやたらと青い。やばい頭がボーっとしてきた。だんだん何も見えなくなる。このままだとどうなるのだろかなんてことも今の状態では考えられない。僕はそのまま倒れこんで目を閉じた。

月曜日の朝、私は両腕で上体を起こし目覚めた。右手でリモコンを使いテレビをつけた。すると、特ダネ!がいつも通りの時間にいつもと変わらないメンバーでやっていた。私は会社に行く準備を始め、いつもと変わらない平凡な一日を過ごし床についた。

火曜日の朝、私は左手でベッドから上体を起こし目覚めた。「ん??腕が片っぽ(左腕)しかない。確か昨日までは左右両腕あったような気が…」そんな風に思いながら左手でリモコンを使いテレビをつけた。すると、特ダネ!の小○ キャスターも佐○ 木アナにも右腕はなかった。「腕は2本っていうのは私の勘違いか…」私は気を取り直して会社に行く準備を始めた。道行く人々にも右腕はなかった。私は少しばかりの不自由さを覚えながら一日をいつも通り過ごして床についた。

水曜日の朝、私は腹筋と両足を使ってベッドから上体を起こし目覚めた。「ん??左腕がない。確か昨日までは左腕があったような気が…」そんな風に思いながら右足でリモコンを使いテレビをつけた。すると、特ダネ!の小○ キャスターも笠○ アナにも左腕はなかった。「左腕が付いてたっていうのは私の勘違いか…」私は気を取り直して会社に行く準備を始めた。道行く人々にも左腕モトイ両腕はなかった。私は不自由さを覚えながら一日をいつも通り過ごして床についた。

木曜日の朝、私は腹筋と左足を使ってベッドから上体を起こし目覚めた。「ん??右足がない。確か昨日までは右足があったような気が…」そんな風に思いながらテレビをつけた。すると、特ダネ!の小○ キャスターも長○ 川アナにも右足はなかった。「足が2本付いてたっていうのは私の勘違いか…」私は気を取り直して苦戦しながら会社に行く準備を始めた。道行く人々にも右足はなかった。「昨日までは楽に歩けたのに今日は歩くのも大変だなぁ」と思いながらケンケンしながら会社に向かった。私はかなりの不自由さを覚えながらどうにか一日をいつも通り過ごして床についた。

金曜日の朝、どうやっても私はベッドから起きあがれなかった。「ん??ウエストから下がない。確か昨日まではあったような気が…」そんな風に思いながら口でリモコンを使いテレビをつけた。すると、特ダネ!の小○ キャスターも藤○ アナにもウエストから下はなかった。「人間には頭とウエストから上しかついていないのか…。私は勘違いをしていたのだろうか」私は気を取り直して会社に行く準備を始めようとしたが、不可能だった。仕方ないのでテレビを観てると映ってる人々も皆頭とウエストから上しかついていなかった。私は奇妙さを覚えながら一日をベッドの上で過ごし眠りについた。

土曜日の朝、私は意識が朦朧としていた。私にはもう頭のみしかなかった。「確か、昨日までは頭とウエストから上が付いていたような…？」やっとの思いで口を使いテレビをつけた。すると、特ダネ!の小○ キャスターもコメンテーターのピー○ にも頭のみしかなかった。「やっぱり人間には頭しかないんだな。何を勘違いしてたんだろう。おバカな私。」と思いながら眠りについた。

日曜日の朝、この世には人類モトイ生物は存在していなかった。

月曜日、いつもと同じように朝をむかえベッドから出てベランダで目覚めのいっぷく、しかしいつもと味が違う。体調が悪いのかと思いそのまま出かける準備に取り掛かる、今日は渋谷でちょっとしたサークルの用事があるので忙しい１日だった。渋谷のタバコ屋ではじめて見るタバコにであった。真っ黒な箱に一目ぼれし、買ってあけてみると、そのタバコ自体も真っ黒でますます好きになっていった。一本すってみると、とても変な味がした。どんどん気分が悪くなっていきなにやら自分が不幸なような感じがしてきた。その日は体調が悪いまま話し合いを終え、家に帰った。

火曜日、昨日と同じように朝をむかえ昨日の黒いタバコに火をつける。昨日とは違う変な味がした。なんともよくわからないが絶望感が襲ってきた。そのまま悲しくなりベッドで寝転び何もする気にならない。

水曜日、久しぶりに友達と会い一緒に飲みに行くが何かいつもと違う、ちょっとしたことで腹が立ち衝突してしまう。これもタバコのせいなのだろうか。

木曜日、今日も何もする気になれない、本を読み始めてもゲームをしてもすぐに飽きてしまうが外に出る気力もなくあのタバコを吸いながら一日が過ぎていく。

金曜日、気が付けばあのタバコも残り数本になっていた。このタバコを吸いきればこの無気力状態から開放されるのかと思うと少し気が楽になった。早く開放されたくて急いですってみる。しかし何も変わらないむしろ悪くなってきた。何で自分が生きているのかわからなくなってきた。自分は何をしに生まれてきたのだろうか、答えが見つかるはずもない。タバコを残り３本残して床につく。

土曜日、この日が最後の朝になることを知る由もなかった。昨日のことがまだ頭の中に残っている。今度は自殺願望が頭をよぎる。そのまま最後のタバコに火をつける。何やら周りがよく見えなくなってきて視界が狭くなってきた。そのまま視界がなくなり意識を失った。

日曜日、この日の朝はやってこなかった。後日談ではその後ベランダから転落して頭から落ちて死んだらしい。これでよかったのだろうか、その答えは誰も知らない。死んだ本人さえも。